

本第一号の官寺になったのは、舒明天皇の時代です。この熊鷹道場が大安寺の前身なのです。大安寺の大安は、天下太平万民安楽という意を含んでいます。

奈良時代の南都六宗

奈良時代の宗教には南都六宗という各派がありましてね、六宗というのは三輪宗、法相宗、華嚴宗、律宗、俱舍宗、成実宗のことです。大安寺は三輪宗の学問所として有名ですが、法隆寺、薬師寺、興福寺は法相宗、東大寺が華嚴宗、西大寺が律宗の研究所であったわけです。南都六宗というのは今の宗教の概念から考えると、禪宗や真宗や日蓮宗などと全然違って、基礎仏教と言われるもので、医学でいえば基礎医学にあたります。ご利益目的ではなく、哲学と言ってもよいでしょう。現今の天台宗とか禪宗などは臨床医学にあたるでしょうね。

出家の動機

よく人からそう言う事を聞かれるのですがね、私の生家は代々医者でした。家は真宗本派でしたが、父も母も非常に信仰家でした。医は仁であると言う考えを実行して来た人でした。かねてから父は兄を家業の医者として、弟を立派な僧侶にして世の為、人の為に少しでもお役に立つようというのが終生の大願でした。

熊本県のあり方

奈良市長の鍵田忠三郎氏が四十一年頃から隈府と山鹿の間の七城村でスペインメロン（最初はそう言っていたのですが現在はキンショウメロンのことです。）をつくり始めたんです。これは安くて良いものを県民の皆さんに食べてもらおうという意図で熊本県が援助したものなんです。このスペインメロンを今から七、八年前に県外へ出荷しようということになって、寺本知事や、東京の神田にある日本一のマルトの関矢社長にも来ていただいて、菊池神社の拝殿を借りまして、初荷のお祝いがあったのです。私もそれに呼ばれましたが、その時寺本知事と一緒にメロン畑を見て回ったのです。この時の知事さんの様子を見て、「なる程熊本県は農業県というけれども知事は農業に対して熱心なものだなあ」と非常に感心したものです。

今度の沢田知事さんに、最初にお世話になったのは熊本空港の開港式の時ですね。私も招待を受けましたので参列したわけですが、その時に感心しましたことは、大抵こういう式には名士と報道人が多いのですが、百姓さんたちが大勢来られて、心から空港ができたことを喜んでおられた姿がよかったですね。これは知事さんをはじめ、熊本県の方々ができる

た。自分自身もいろいろと人を助けた人ですが、加持祈禱などいろいろな事を行って少しでもよくなるとうと積極的に努力する自力本願の教にうたれ、弘法大師の真言宗に強くひかれていたようです。立派な僧侶にするためにはどうしても、高野山で修行させねばという悲願を持ったわけですね。当時九州の片田舎から高野山へ入山する事は並々ならぬ事で、親も子も大変な覚悟がいるわけです。現在の子弟の海外留学以上の事でした。私は高野山に入山したのが丁度十一歳でした。

宗教観について

第一最近の日本に宗教あるいは宗教心というものがあるのかないのか、これを先ず考えなければならぬと思いますね。

因みに、僧侶もそうですけど全体として人間が生まれて死ぬまで、葬式とか年忌とか、お盆とか、お彼岸とか、年中行事の形式的なことを繰り返しているだけにすぎないように思えるのです。人が生れたらお祝いをし、死んだら葬式をするという一つの行事をやっているだけで心の底から宗教心つまり我々の言葉で言えば「菩提心」なのですが、それを培うということが欠けているようです。外国人には宗教心がありますので、例えば花を折ったり、公園をよこしたりしない

だけ、あの付近の百姓さんたちに迷惑をかけるないようにして用地買収をされたという努力のためだろうと思つて、この新しい知事さんはすばらしいなあと思ひましたね。

その次にはこの間、在阪の熊本県人会で知事の歓迎会を東洋ホテルでいたしました。その席で色々な県政のお話もしていただいたのですが、その時の話に「私は農業に重点を置いているのですが、工業についても軽工業、重工業を問わず公害のない企業を誘致したい。」という姿勢は立派だと思ひましたね。

あの時知事は、おみやげに西瓜と天然果汁百多缶入りジュースを持って来られたのですが、県民の代表とも言ふべき知事さん自ら、おみやげに熊本県の農産物を持って来て、私たち県外へ出ている者に食べてもらおうという熱意には、熊本県は農業で立つんだ、ここまで農業に力を入れているのだという決意が表わされていて、非常にすばらしいと思ひました。

ドイツとの交流について

私が大学を出る時の卒業論文が、「高野山根本大塔の研究」というものだったので、これがその当時ドイツで仏塔を研究していたベルリン大学教授、F M トラウツ博士（故

という公徳心も身につけてるので、ヨーロッパでは、ちょっと公園へ行ってもリスがよって来ます。そうすると子供たちは母親からもらって来たパン切れをリスに与えて楽しんでます。こういう姿を見ると、ここには自然を愛するということのほかに、一つの宗教心が見受けられますね。

また日本では僧侶の布教も足りないようですよ。ただ祖師の教えのうえにあぐらをかいて、自分達で努力しない。既成宗教の墮落が大いに叫ばれていますね。

今宗教家について言えることは、共通性がないということ。我が強すぎるということですね。私は無我の話をよくするのです。しかし、最も無我であるべき僧侶自身に執着心がありすぎるという場合も往々にしてあるように思えます。自分の宗門の権益を荒されないようにと、常々がっちり守っているからでしょうね。それで私はよく、「日常我々はそういう守りの態勢をとってはいけないのだ。キリスト教も仏教も各各宗各派が一丸となって社会のお役に立つようにしなければいけない。各宗各派の僧侶も法尼も、神父さんもシスターも共に手を握って社会への奉仕を」と強調しています。また信者の方々が僧侶にあぐらをかかせすぎないように、皆さんからも宗教家に対するきびしい批判、叱咤が欲しいですね。

人の目にとまりまして、これを是非ドイツ語に翻訳したいという話が出たのです。そこで私は京都の日独文化研究所で翻訳の仕事を始めました。昭和七年でした。私が熊本の工兵連隊にはいることになり、その間は五高のドル先生と娘さんと一緒に、ドイツ語の翻訳の訂正を毎日曜日にやったものです。

日曜毎にドイツ人家庭を訪問するというので憲兵に、にらまれた訳ですが、努力の甲斐あって昭和九年に日独両語で出

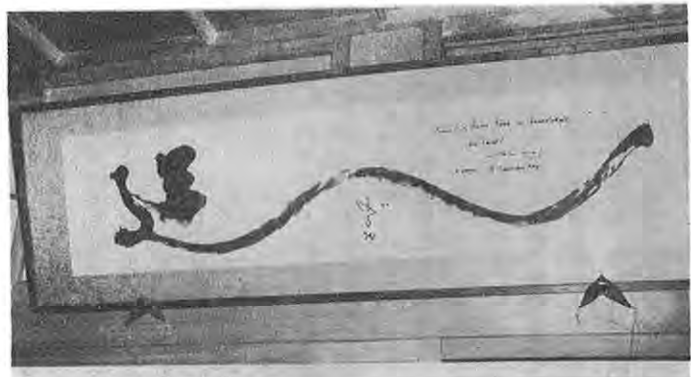
若者に対する意見

私は、ユースホテルの奈良会長、野鳥の会の会長、日独協会会長などをしてるので、若い人たちとの接触がよくなりますね。「この頃の若い者はどうもなっとらん」と悪い面ばかり取り上げるのですが、私は、「そうじゃないんです。この頃の若い者は実にすばらしいのですよ」と言っております。またそういうことをよく体験してもおります。奈良には青年による善意ガイドがあります。これは大学へ行っているメンバーが一週間を毎日交代で日に二人づつ受けもって、外人の案内をします。もう無報酬で、十年も続いているのです。彼らは外人に対して奈良の印象を良くしていると思ひますね。青年ガイドの若者たちは、社会奉仕は尊いことで、当然なすべきことだと考えているので、こういう縁の下力持的な役目を果たすことができるのだと思ひます。また、農村青年団とか、農村青少年のリーダー講習会などに行きますと実に真面目に聴いているし、筆記をして、よく質問もしますね。却って私も年輩者が考えさせられます。若い者をもっと理解するように努めて、適当な助言をするようにすべきですね。

版することが出来ました。その後ドイツ人との交流が深まりました。昭和三十六年に一等功勞十字章をいただき、更に四月からリュプケ大統領の招待で、国賓として、大分県知事木下郁氏、徳島県知事原菊次郎氏、北大大野精七総長の諸氏とドイツ訪問旅行をしたわけです。ゲート協会、ペートーベンハウス等の記念植樹が見事に成育しまして今回の招待で自分の目でそれをみて感慨一入でした。現在ラインシュタインの特別名誉会員、ゲート協会の名誉会員なのです。

熊本県の観光について

熊本県は観光課が林務観光部に置いてありますね。これは自然保護ということと、観光ということを一つのものとして考えていこうという姿勢の表れで、実にいいことだと思ひます。そして熊本県は肥後菊、肥後椿や肥後菖蒲の育成をしたり、その他公園に花を植えたりして、緑を愛するとか保護するというよりも、もっと積極的に緑を育成しておられる。これも実に立派なことですね。



▲ドイツとの交流も深くピアニスト・ウイルヘルム・ケンプの署名のある額